

# 凶星物語 終幕のみ

蛇ヤミー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本作品は「小説家になろう」投稿作品「シャングリラ・フロンティア」の二次創作となりま

す。当時、感想欄を中心に大いに盛り上がったロックピッカーの短編です。

今更感がありますが、せっかく発掘されたので……。

ギャラクシアレベルはなかなか設定が複雑なので、私の作品では荒い部分もあるかもしれませんが、二次創作ということでご容赦を。

目次

## ラストチャプター

ああ、むかつくぜ。

本当に腹立たしい。

未来からやってきたとかのたまうヴィラン……名前なんぞどうでもいい。

俺様はこいつをぶっ潰したくてたまらねえ。

「ミーティアスにカースドプリズン。この時代の双璧ともいえる者どもも、この程度か……」

「くっ……」

「チィ……」

ミーティアスはともかくこの俺様を小馬鹿にするような目で見やがったな。

「……おいミーティアス……手を組めなんて寒い事は言わねえ……手を貸しな」

「はは……まさかあんたからそんな言葉が聞けるなんてな」

「るせえ……てめえは俺様の道具に徹してればいいんだよ」

「ほう。ヒーローとヴィランの共同戦線か。面白い……こい」

「ハアツ!!」

「集えゴミども! 凶星引力!」

フォビドウン・グラビティ

ミーティアスは縦横無尽に跳ねまわり、俺様は力を使い<sup>武器</sup>ゴミを集める。

俺様とミーティアスの猛攻が奴を肉薄する。

だがそれでも奴は崩れない。

「これは……なかなか。だが……ッ!」

ミーティアスの攻撃をよけ、俺様に一撃を与える。

——ドンツ!!

「ガァ……ッ!」

ぐ……耐えきれないダメージじゃねえ……が、ヒーローはそんなことを気にしねえ。

「カースドプリズン!!」

「さすがヒーロー。余所見が得意だ」

「しま——」

——ズガアアアアアン……ツ!!

あのアホ、俺様に気を取られてデカイ一撃を食らいやがった。

「ち……」

「ふむ、それなりに楽しめたが……まあこんなものだろう。スピード型のミーティアスに、パワー型のカーズドプリズン。連携に隙が出来るのも当然。むしろ持った方だろう」

ああ、奴の言うとおり、ただでさえ相性の悪い俺様たちが、出来もしねえ即興連携をかましたにしては上出来だろうよ。

超必殺ウルトラを使えるほどのパワーは残ってねえし……どうしたもんか。

んなことを考えていると、後ろから最近付きまとってくる声が聞こえてきた。

「おじ様!!」

「……ガキンチョ」

そいつは俺様の前に立ち、奴に手持ちの斧を向けていた。

はっ……まさか闘うつもりか？

「……ロックピッカー……私の世界の新米ヒーロー風情が何をしに来た……場違いだ」

「そんなの関係ない！ 私はおじ様を助けるために過去ここにいる！」

「……おいガキンチョ、何度も言わせんじゃねえ。俺様は助け何ぞ求めてねえ。うせろ」

「いや！ 私はおじ様を助きたい！」

奴はだだをこねてるようにしか見えないガキンチョを一瞥し。

「目障り」

そう吐き捨て、攻撃を放った。

「……うう……」

——ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ——ツ!!

「……………え」

「ほう」

気が付けば俺様はガキンチョを後ろに、奴の攻撃を受け切っていた。

「おじ……様……あの時と……同じ……」

「はは、どうしたカースドプリズン。まるでヒーローの様じゃないか」

「るせえな……俺様がどうしようかと俺様の勝手だ。大体、俺様とミーティアスとの戦いの場にてめえが割り込んできた時点で、もう世界が違え……いや、ユニバースが違えんだよ。ヒーローだのヴィランだの、今は関係ねえ……俺様は俺様のやりたいようにやる」

「ふん……威勢はいいな。だがどうだ？ 今のお前はボロボロ、残っていたパワーも今の攻撃で吹き飛んだだろう。そんな状態で何が出来る」

奴の言葉に、思わず笑みが浮かぶ。

「何度も言わせんなよ……ユニバースが違えって」

「何を……？ ……ッ!？」

奴も初めて俺様の後ろに気付いたらしい。

そりやそうだ、目障りなもんは見ねえのが一番だからな。

「元の世界線、俺様とミーティアスのユニバースにいねえはずの存在は、てめえだけじゃねえだろ」

要するに、未来の世界のヴィランを倒すには、未来の世界のヒーローの力が必要って訳だ。

「おじ様………今なら、出来ます……!! 私………ヒーロー、ロックピッカーが開錠します!!」

「まさか………ッ!!」

「遅えよ。脱獄!!」

プリズンブレイク

——ドンツ!!

超<sup>ウルト</sup>必殺発動と同時に一撃を加える。

さあて、さっきの借りを返させてもらおうか。

「く……おのれカースドプリズン……いや、プリズンブレイカーツ!!」  
「さつきまでの威勢はどうした! なあ……ああわりい、てめえの名前、覚えてねえわ」

「……おのれ………ふん、だが……それは制限時間がある技………数分さえ耐えればそれで勝ちだ!!」

「そうかい」

——ドン!

——ドン!

——ドンツ!!

幾度かの衝突の後、若干の距離を取る。

奴の焦りが見て取れる。

「馬鹿な……もう制限時間は過ぎているはず……何故ツ!？」

「知るかよ。……つーか……オオイツ!! ミイイイイイテイ  
アアアアアスツ!! いつまで寝てやがる!! さつさと起きろオツ!!」

——ガゴンツ——

俺様の声にへらへらと笑いながら<sup>あのアホ</sup>ヒーローが立ち上がる。

「やれやれ、先輩はおっかないな。おちおち昼寝も出来ないや」

そう言って、ミーティアスは即座にトツプスピードに乗る。

再び俺様とミーティアスの猛攻が奴を肉薄する。

だが今回はさつきとは違う。

隙なんぞできねえ。

俺様とミーティアスのスピードが奴の全てを凌駕する。

「終わりにしよう……超<sup>ウルト</sup>必殺」

「サービスだミーティアス! ……合せてやるよ」

ミーティアスの足に眩い蒼き光が宿り、俺様の足には荒ぶる緋き光

が宿る。

「馬鹿な……流星と凶星が交わる……だと……!!」

「ミーティア・ストライク!!」

「くたばりやがれエエツ!!」

—— スドオオオオオオオン………ツ!! ——

数日後。

「おじ様、約束を果たしに来ました!」

「ふん、俺様がそんな約束を守ってやる義理はねえ……が、ちょうど昼寝の気分だ。……その間お前がどうしようとか俺様の知ったことじゃねえ」

あの戦いの後、当然と言わんばかりに、俺様にまとわりついた牢獄。それを見たガキンチョが、また自分に鍵を開けさせろとしつこく言ってきた。

聞いてやる必要はねえが、あまりにしつこいので一度だけチャンスを作る事にした。

横になる俺様を満面の笑みで見ってくるガキンチョに、少々居心地は悪いが、気にしないことにした。

そして恐らく、ガキンチョは自分の持てる未来の技術を終結させ、牢獄の鍵穴に挑んでいるのだろう。

—— だが。

「開か、ない………何で………だって、あの時は………!」

「さあな………まあ、イレギュラーなんてもんは頻繁に起きるもんだ」



そして俺様は立ち上がる。

そんな俺様を、唇を噛みながら今にも泣きだしそうな情けない顔で見つめて――。

「……………うう……………えい!!」

――取り出したマスターキーを振りかぶった。

「どうおあ危ねえツ!! おいこらガキンチョ何しやがる!!」

反射的によけることが出来た俺様は、ガキンチョを睨みつける。

「だって……………この鍵が開かないとおじ様は……………」

目に涙を浮かべて口ごもる、ガキンチョを俺様は鼻で笑う。

「ハッ、ガキンチョ、お前わかかってねえな」

「え……………?」

「確かにこの牢獄はあのクソツタレに装着された物、邪魔くさくて仕方ねえ。だが俺様は俺様の力でこいつを脱ぎ捨てるんだよ。ミーティアスの野郎と決着をつけてな。それとも何か? お前は俺様の邪魔をしようつてののか?」

「ち、違います!」

「ふん、いいか覚えておけ。俺様は俺様のやりたいようにやるだけ……………俺様のやる事にいちいち文句を出すな」

「!……………はい!」

返事を聞いた後、俺様はさっさとその場を去る。

そんな中後ろから声がかかる。

「でも… 私も私の意思で、おじ様の鍵を開けたいと思ってるんです! だから……………おじ様も私のやる事にいちいち文句を出しちゃダメですから!!」

その言葉を聞いても俺様は足を止めることなく歩き続けた。

だがまあ……面白いこと言うじゃねえか。

俺様も思わず口元が緩んじまった。